

図絵による失われた景観の記録

Record of Lost Landscape By Pictorial Map

多摩美術大学環境デザイン学科教授、岸本章設計所／1956年生まれ。多摩美術大学建築科卒業。東京藝術大学建築科修士課程修了

岸本章 Akira Kishimoto

いわき市の津波被害

東日本大震災の津波被害は、岩手県と宮城県について報道されることが多く、福島県はもっぱら原発の被災の話が中心になっていたが、浜通り、いわき市の沿岸部に大きな津波被害を受けた地域がある。塩屋崎灯台をはさんで南の豊間地区、北の薄磯、沼ノ内地区で、特に薄磯はほとんど家屋が残っていないほどの被害を受けている。しかし、この地区の被害が全国放送で報道されることは少なかった。

いわき市の太平洋沿岸部は、気候は温暖、寒暖の差が少なく、積雪も少なく、台風の被害も少ない、極めて過ごしやすい土地であった。それだけに津波への備えはほとんどなく、沿岸の堤防も低かったため、壊滅的な打撃を受けてしまった。沿岸漁業が盛んで、鳴き砂がある砂浜は、海水浴やサーフィンでにぎわう海でもあり、穏やかな海がもたらす恩恵のなかで暮らしてきたと言える。その海が牙をむき、海を見ながら暮らしてきた家々を押し流し、さらに原発事故により漁に出られず、先が見えない状況になっている。

ここで紹介する企画は日本民俗建築学会の災害復興支援の一貫である。日本民俗建築学会は伝統的な民家や生活を調べること、その価値を後世に伝えていくことを目指している学際的な学会である。震災で多くの歴史的な遺産が失われ、伝統的な生活が消えるかもしれないという状況のなか、いわき市で震災以前から伝統的な生活を保存する活動をしてきた

組織、「プロジェクト傳」の活動を支援するかたちでスタートした。

図絵による被災地支援のかたち

津波被災地支援ですぐに浮かんだのは被災前の集落の模型をつくることであった。具体的な形になれば景観の記憶がよみがえることは確実で、模型を前にして震災前の景観について語り合える場の価値やその効果は、すでに各地の事例が報道されつつあった。しかし、家がほとんど流されているなかで、どこに模型を置いたらよいのだろうか。また、すでに遠方に移った人も多い。また、大きな模型になると保管が難しく数年後には処分になる厄介者になる可能性がある。いつでも誰でも見ることができるもの、一時的ではなく、次の世代までも伝えられる何かを残せないかと考えた結果、被災全戸に配布できる地図の本というかたちとして町の記憶を残すことにした。

制作は多摩美術大学環境デザイン学科の学生12名が担当することになった。震災直後から多くの大学生のボランティアが被災地に集まったが、この企画は環境デザインを学ぶ美大の学生にとって自分の得意な分野で支援に貢献できるよい機会となった。

今では高精度の航空写真が簡単に手に入るが、細い道や水路が見えないことがある。一方一般的な地図では、屋根の形や木々のあり方が見えないことがある。また、観光案内図などに見られるデフォルメは記憶をゆがめる可能性がある。そ

こで縮尺は正確に、家の形状もわかる範囲で正確に記し、あくまで客観的な地図をベースとしながら、しかし、手書きで温かみのある表現をとることで、地図上の道をたどって歩いているような気分になり、かつての景観を思い出せることを目標とした。1/1,500の縮尺によるA4サイズの本として、被災した方々に配布することで、いつでもどこでも開いて見ることができるものとした。この地図を図絵と呼ぶことにし、本のタイトルは「あんばさまの町図絵」となった。「あんばさま」とは関東から東北の太平洋側の漁村で信仰されていた疱瘡除けや、海上安全の神とされ、この地にもあんばさま信仰が根付いている。

制作のプロセス

2013年1月、学生たちは現地を見学し、具体的な土地のイメージを把握した。そこで地元の方々に、被災の状況とともに被災前の町の様子を語っていただいた。そのうえで、都市計画図、国土地理院などの航空写真、住宅地図を参考にし、分担してペンによる線画を手書きで作成した。その線画を一度デジタル化したうえで統一されたルールのもと、各自パソコン上で色を重ねていった。

また、地元の方々による屋号の調査をもとに、市販の住宅地図とは異なる、屋号で探せる本とした。屋号とは同じ名字が多い土地で、日常呼び合っている愛称のようなもので、職業に由来するものから個人の性格、風貌に由来するものまで



図1 ベースになる地図の作成 [図1-3 筆者撮影]



図2 2012年3月、現地の状況。ポストの脚が残る郵便局



図3 写真などをもとに修正をくり返す



図4 右頁の図絵に記されている家の屋号を左頁に記載

さまざまなきっかけで付いていた。その地域の人にしか通用しない呼称だが、今までこれが記録として残されることはなかった。

山の名前、谷の名前、坂道の名前、大きな木などから漁場の名前まで、通常の地図には記載されていないランドマークや正式名称とは異なる俗称なども可能な限り地図上に記録していった。また、どこでどんな魚が捕れていたかなど、漁業に関する情報も寄せていただいた。こうして集めた情報をもとに震災直前の姿として制作した。

2013年6月と8月、一度書き上げたものを地元の方々へ預け、追加情報や間違いの訂正をお願いするというプロセスを2回くり返すことで、お地蔵さんの位置、地名の俗称や小さい川の名称、ポストの位置など詳細な情報を順次追加していった。

2013年9月、完成した42枚の図絵からなる本が、被災した全住戸に1冊ずつ配布された。

当り前の景観の価値

町の景観は当たり前過ぎて、意識して見ることはあまりない。家が1軒なくなるとそこにどんな家が建っていたか思い出せないほどである。しかし、日常意識していないものの集積で町の景観は成り立っていて、当たり前前の景観は失って初めてその重要さに気付くものである。津波で失われた町の景観は、たとえ同じ敷地に建て直したとしても、昔と同じ景観にはならない。特にここでは谷を埋めての高台移転や巨大堤防など防災上大きく土地を改変する予定になっている。住民の心のよりどころであった神社の山は、津波から逃れて階段をかけたのぼることで

多くの命を救ったが、その山さえ崩してしまう計画になっている。津波で家々が流されただけでなく、その後の造成で、住民にとって歴史的、精神的に意味のある道付けや地形までが失われてしまう。かつての町の面影は完全に消滅してしまう。この状況のなかでつなぐべきものは、町の記憶しかない。長い間住み続けてきた町の景観を思い出せるものを残すことは重要であると考えます。

しかし、この本は「昔はよかった」と思ってもらえるだけの存在ではない。これから生まれてくる子どもたちにも語り継ぐことができるだけの資料を残すことで、この土地での暮らしを継承していくことができるのではないかと考える。この本を見ることによって幸せな普通の風景の大切さを認識し、そのよさを共有することでこれから別の場所につくる町づくりに役に立ててもらえることを願っている。